

# Desdemona の愛と *Othello* におけるその意義

—— 特にカタルシスに関連して① ——

英文学教室 岡 村 俊 明

この論文では、Desdemona の愛（特に、Othello に対する）と、*Othello* におけるその意義を考えるのであるが、その考察の最終目標は、*Othello* は Shakespeare の悲劇としては、どの程度に完全なものであるか、更に具体的にいえば、この劇を観て我々はどの程度のカタルシス (catharsis) を感ずるか（これはその完全さを測る一つのものさしにすぎないのだけれど）ということである。だから Desdemona の愛について考えるまえに、悲劇の catharsis について言及してみたい。

## 1

悲劇の効果には catharsis という概念がある。アリストテレスがはじめて使った言葉であるが、その説明が不十分なため、ルネッサンス以来、この言葉の解釈ははなはだ多岐に分かれている。アリストテレスの『詩学』、第六章の冒頭の部分を引用しよう。

A tragedy is the imitation of an action that is serious, has magnitude, and is complete in itself; in language with pleasurable accessories, each kind introduced separately in different parts of the work; in a dramatic as distinct from a narrative form; with incidents arousing pity and fear, whereby to provide an outlet for such emotions.<sup>②</sup>

今日にいたるまでに catharsis についてなされてきた解釈を GERAL F. ELSE は7つの項目に総括している。Else の総括を秋山健氏の翻訳にて引用するが<sup>③</sup>、この論文の推論を進めてゆくのに都合のよい二つの項目だけをとり出してみよう。

(1) ほとんどの解釈が原典中の「あわれみとおそれ」を観客の感動ととり、「あわれみとおそれ」が観客のうちにひきおこされ、ついで浄化 (purified) されるか、浄瀉 (purged) されるものとなっている。

(2) これらの解釈はすべて（暗黙のうちに）この効果は自動的なもので、あらゆる悲劇によってひきおこされる事を前提としている。

(1)については、catharsis はプロットのなかにおこまれているのではなく、我々観客のうちにもたらされる感情である、ということだ。(2)からいえることは、この効果は、当然のことながら、Shakespeare 悲劇にもひきおこされる。ここまでは我々の間に大した意見の相違はないであろう。ここでもっと論究したいのは、Shakespeare 悲劇では、恐れと哀れみだけによつて、catharsis が十分に働くかということである。悲劇が観客の心にひきおこす、恐れと哀れみについては、次のように

① 本稿は日本英文学会第十九回中・四国支部大会における発表に加筆、訂正したものである。

② Aristotle, *Poetics*, trans. John Warrington (Everyman's Library, 1963), p. 12.

③ 秋山健, 「カタルシス——最近のもう一つの説」, 『英語青年』, CXII (1966), p. 162.

説明出来る。悲劇の hero の没落に対し、そのすぐれた人間が死ぬとき、我々はそれを愛惜し、哀れみの情を感じず。そして正義もしくは道徳的秩序が hero の少しの欠陥をも仮借せずに死によって罰するとき、我々観客は恐怖を感じず。しかし恐れと哀れみが働けば、十分な catharsis がもたらされるのであろうか。*Julius Caesar* を例にとってみると、その hero の Brutus の最後はたしかに哀れみと恐れの高烈な感情をひきおこす。が十分な catharsis は感ぜられない。その理由として、村岡勇氏は次のように考えている。「Brutus は単なる思わくの為に、Caesar が万一皇帝になったときは、手にあまると思って、Caesar を殺害した。その後適切な手段をしなかったために、ローマを混乱におとし入れ、国民を不幸においやりながらも、彼の死に面しては、そのことを反省もせず、それに対して責任を感じずるようなこともなく、しかも私の友人は最後まで私を裏切らなかったといって、楽天的なことをいって死んでゆく。それに対しては、我々はやりきれないものを感じ、我々の魂がきよめられたとは決して感じない。だから悲劇の最後で、catharsis がもたらされるのは、恐れと哀れみのほかに、hero が自分の非を悟り、自分の罪を当然と考えて身をとじること、即ち hero が自己認識に達するのにも欠くことのできない条件である。つきつめると、Shakespeare の悲劇は自分の生命とひきかえに自己認識に達するはなしだといえることができる。」<sup>④</sup> 更に村岡氏によれば「その自己認識は、ハイルマンなどによると、自分もまた罪をまぬがれない人間だという認識であって、これがあるため、悲劇は芸術に相応しい教化の手段たりうる、という。しかしシェイクスピアは自己認識についてそういう消極的な意味ばかりでなく、もっと積極的な意味も認めていたように思われる。無論、シェイクスピアは、悲劇の主人公が、生命と引き換えに自分というものを掴んだとき、神を認識するばかりでなく、神と同一化されるなどと主張しているわけではない。しかし、シェイクスピアが最後に自分を知った主人公に人間以上のせたくを与えていることも事実である。狂気になる直前のリアや、『わたしは火と空気。他の元素はこの世に残す』と言って死んでいくクレオパトラなどを想起しただけでも、その辺の事情は明らかであろう。」<sup>⑤</sup> だから死ぬ直前での<sup>⑥</sup> hero の自己認識が深ければ深いほど、catharsis がより十分に働き、より成熟した Shakespeare の悲劇としての大きな条件を備えることになる。*Othello* の位置づけには、いくらかの方面から考察されることが可能であるが、ここでは *Othello* の自己認識について考察することにする。すると、*Othello* の最後の自己認識に対して、*Othello* に対する *Desdemona* の愛はどのような関連と意義をもっているのであろうかを考えるのが、この論文の目標にもなるわけだ。

## 2

では *Desdemona* について考えてみよう。彼女は踊りも、料理も、裁縫も、歌もうまい。優しさと寛大さがあり、*Othello* の言葉をかりて言えば、目がいたくなるほど美しい。それでいて知的で、威厳があり、帝王とともに寝て、その事業を指図する資格だってある女である。いつの時代にあっても、理想的な女の原型であるように思われる。だから彼女は高貴な何人かの人から結婚の申し込みを受ける資格があった。どんな縁談にも耳をかさず、彼女は放浪の一將軍 *Othello* に恋をして、結婚する。*Othello* はムーア人であるが、エリザベス朝では、それは negro と同じ意味である

④ 東北大学文学部における、村岡教授の「英文学特殊講義」（昭39年度）から引用させていただいた。

⑤ 村岡勇「エリザベス朝文学—自然観との関連について」、東北大学『文化』、XXX, pp. 540—1.

⑥ 死の直前ではなく、劇の中頃で hero が自己認識すると、悲劇にはならない。hero の死が回避されるから。Shakespeare の悲劇の hero はすべて死ぬ—そのことが特質であるから。

こと，“sooty bosom”をし，“thick lips”をもっていて、人々から軽蔑され、偏見をもってながめられていたことは、A. C. Bradley や D. Wilson が指適している通りである<sup>⑦</sup>。彼等の結婚には大きな不釣合があるが、父 Brabantio はどうしても理解できず、次のように言う。

She is abused , stolen from me and corrupted  
By spells and medicines bought of mountebanks ;  
For nature so preposterously to err,  
Being not deficient, blind, or lame of sense,  
Sans witchcraft could not. (1.3 60-)

また Emilia は後になって彼女が思っているさまを Othello に向かって、“black devil” (5. 2. 160) とか、Othello と Desdemona の結婚を “most filthy bargain” (5. 2. 160) というが、これはエリザベス朝における多くのイギリス女性の心を代弁していると考えてよい。彼女の父や Emilia によって代表されるような偏見を越えて Desdemona は Othello を愛するが、その理由は Othello が未知の危険や困難をもものとししないで、それらに乗切ること、むしろ喜びを感じている雄々しい彼の姿のためである。そして彼女は Othello を心の目でみる。

I saw Othello's visage in his mind,  
And to his honours and his valiant parts,  
Did my soul and fortunes consecrate. (1.3.252-)

人種のこの強い偏見を飛び越えさせたのは、Desdemona の純粹で高貴な精神愛ということができる。しかし次の言葉からわかる通り、彼女の愛は同時に肉体的でもある。

That I did love the Moor to live with him,  
My downright violence and scorn of fortunes  
May trumpet to the world. My heart's subdued  
Even to the utmost pleasure of my lord. (1.3.248-)

彼女は結婚した以上は、十分な意味で妻であろうとする。精神的にも、肉体的にも、彼を愛している。十分な意味で夫を愛している妻がするように、彼女は Othello の生活態度とも一体化しようとする。Othello の戦士としての生き方に魅力を感じたのであるから、彼女もその生き方を学ぼうとする。彼が “O, my fair warrior!” (2.1.180) と呼びかけ、彼女自身も “unhandsome warrior as I am” (3.4.156) と言っているのをみても、わかるとおりである。そして彼女と一緒に Cyprus に行くことになる。結婚生活は私的なものであり、戦争は公的なものであるが、公私両面において、彼にかしづいている姿勢がある。このような彼女が、この後に起った事件にどのように反応し、Othello に対する彼女の愛はどのように変化するかを考えてみよう。

### 3

Iago は Cassio の地位を奪うために、Cassio と Desdemona の関係を Othello に疑わさせよう

<sup>⑦</sup> A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (London, 1904), pp.198—202, J. D. Wilson (ed.), *Othello* (The New Shakespeare, 1959), p. ix.

とする。いわゆる“temptation-scene”が始まるのだが、その有力な根拠を Othello に提供したのが、Desdemona のハンカチである。彼女は Othello からもらった大事な刺繍のしたハンカチを落したが、Iago の罠にだんだんとはまりかけてきた Othello にとがめられる。「なくしたり、人にやったりすると、それこそ大変な災難がおきるぞ」と言われ、またハンカチの神秘的な由来を聞かされ、彼女は驚きなくしたのではないと二度も嘘を言う。いつ、どこで、どのようにしてハンカチをなくしたのか、またなぜ Othello が執拗にハンカチを見せろと言ったかを、彼女は深く考えようとはしない。彼女はあとでその紛失を歎くばかりで、Othello の心を全然理解することはできない。そして彼女はすぐさま、嫉妬の当の相手である Cassio の復職の願いをもちだす。彼が退場したあと、この原因を国事のせいにして、その時「男のかたって本当の相手は大きな事件のはずなのに、小さなことにいらいらするものなのよ」(3.4.148—9) と考える。男女関係のことについては、はるかによく知っている Emilia と同様に、我々も Othello が嫉妬に狂いはじめたと思う。ハンカチの紛失を通じて、浮気の相手との関係を Othello が疑っているのだが、彼女はそれに全然気がつかない。だから Othello の疑惑がますます高まっている第四幕第一場においても、不注意に次のように言う。

A most unhappy one; I would do much  
T'atone them, for the love I bear to Cassio.

また Othello の後任に Cassio が任命されたと聞いて、

I am glad on't.

と。堪えきれなくなった Othello は彼女をなぐる。そして、第四幕第二場で Othello が彼女に姦通したと言って責めると、彼女は

To whom, my lord? with whom? how am I false. (4.3.41)

と答える。ここで彼女は Othello の怒りの原因はヴェニスからの手紙にあるとしか考えない(4.2.43)。なぜなら、彼女は姦通した事実はないし、する意図もない。だから彼女にとってのこの事実を人が疑うわけがないと思っている。純粋な子供の論理というべきであろう。彼女は Othello のきたない面に気がつかない、Bradley の言うように、彼女は未熟な“a child of nature”<sup>⑧</sup>である。この論理の単純性は、彼女の信念に裏打ちされていない曖昧な態度とともに、彼女の特質となるものである。曖昧な態度の例は次に最も明白に示されるであろう。

寝室の場面(第五幕第二場)の前に、彼女は死を強く予感する。だから寝床にはい前に、極力努力して、弁解し、無実を明らかにして、それでも、駄目なら知られずに逃げるか、または死を平気でうけて、自らの死によって、Othello を教化するという彼女の強い愛の態度を続けるべきだと思う。それが理性ある大人の態度であろう。しかし彼女は Othello がくる前に眠っており、しかも彼の殺意が明らかになると、極力これを避けて、慈悲を願うとか、追放してくれとか、それでも駄目なら殺すのを明日まで待ってくれとか、30分でも、いや一言祈りを言う間でも待ってくれと、執拗に何度も生を乞い願う。ここでは彼女の態度は一定してはず、曖昧であり、その前提の思索がなく、女性特有の大きな弱さがある。

この節でまとめるならば、次のように言えるだろう。Desdemona は自分でその根拠を与えてい

⑧ A. C. Bradley, *op. cit.* p. 205.

ない、Othello の嫉妬については全然理解できない。しかし前の節でみた彼女は偏見のために誰にもわからない、Othello の本当の姿をつかまえている。だから彼女は知性は相当に高いが、ある前提においては、彼女の知覚は低いものであると、言わねばならない。彼女は大胆なところもあるが、臆病なところもあるといえよう。結局彼女の知性や、知覚や、態度の底に流れているものは、統一がとれていないといえる。彼女の内に矛盾を含んでいる。このことは、彼女が明確なそして確固たる信念をもっていないせいだと思う。その理由は、信念とは成熟した大人がもつ態度であり、美醜などを経験し、鋭い知覚力で見つめて、思索してのち生まれるものである。その態度には、人生の理想的なものを求める反面、それに対立するものを識別することが必要であるからである。彼女は鋭い知覚力も、対立概念を識別する力もないといえる。強い信念をもっていない Desdemona が、この後に述べる彼女の至高な愛とどのような関係をもっているかを考えてみよう。

嫉妬に狂った Othello は Desdemona をなぐるが、この後も彼女は Othello の誤解をとこうとはせず、ただ無限の忍耐と寛大さと謙虚さの態度を続けることになる。そして彼女の絶大なる善意で Othello の嫉妬を解釈する。

'Tis meet I should be used so,very meet.  
How have I been behaved, that he might stick  
The small'st opinion on my least misuse? (4.2.109-)

また次のような科白もある。

These that do teach young babes  
Do it with gentle means and easy tasks:  
He might have chid me so. (4.2.112-)

そして彼女は Othello からうけた冷遇も、叱責も、不機嫌な顔もみなうれいという境地になっている。

That even his stubbornness, his checks and frowns—  
Prithee, unpin me—have grace and favour in them. (4.3.20-)

その理由を追求して、相手の悪いところを認め、それを直さすよう、相手に認識さすのではない。次の科白は彼女のこの態度をよく表わしている。

Heaven me such uses send,  
Not to pick bad from bad, but by bad mend. (1.106)

こういう態度はとうてい普通の人間がとれるものではない。彼女は殆んど絶対愛ともいえる愛をもっているといえよう。次の Emilia との会話に注意してみれば一層明白になるであろう。Desdemona はもし自分が死ねば、“wedding sheets” で死体をくるんで欲しいと Emilia に頼む。このことは次の意味をもっている。彼女はこのような不幸な結婚でさえ、死後まで、即ち、Heilman が言っているように、象徴的な意味で「永遠の愛」の態度で考えている<sup>⑨</sup>。またあんな仕打ちをされたのだから、「Othello さまに会わなかったらよかったわね」と Emilia が言うと、彼女は

⑨ Robert B. Heilman, *Magic in the Web* (Lexington, 1956), pp. 190f.

So would not I: my love doth so approve him. (4.3.18)

と答える。また二人の仲をだれかが中傷しているかもしれないという Emilia に対しても、彼女の答えは次のようである。

If such there be, heaven pardon him!

また彼女の貞節は、たとえ浮気の報酬に全世界をくれても、くずれないものである。それぞれの点において Emilia とは大きな対照をなしているといえよう。

彼女の愛が最もよく表わされているのは、その last words においてであろう。彼女は無実の罪で、最後の祈りの時間も与えられずに殺される。そして Othello も確認しているように (“still as the grave” 5.2.97) 死んだと思われた。しかし彼女は意識をとりもどして、最後の力をふりしぼって、Emilia の「誰が殺したの」に答える。

Nobody: I myself, farewell;

Commend me to my kind lord: O, farewell; (5.2.125)

この科白は普通の人間の言えるものではない。ここに最も明確な形で、無条件的な神の愛にも似た絶対的愛があるといえよう。このように罪とがもなく無慈悲に殺されようとしても、Othello を恨むことなく、ただ彼に善意を施そうとする意図ばかりがある。絶大なる優しさと、慈悲心がある。そして一度死んだと思われていてこの言葉を言ったので、あたかも彼女は再生、復活したような感じを我々に与えるのである。この場面になると、彼女の愛はキリストのイメージさえもっている。I. Ribner によると<sup>⑩</sup>、先に引用した “Commend me to my kind lord” はキリストが人類の罪を負って死んだと同じように、Desdemona も Othello の罪を負って死んだのである。また彼女の蘇生はキリストの復活にも比すべきものだ、と言っている。このようにあまりに強いキリスト説は別としても、当時の観客は、Desdemona の最後の場面では、彼女を普通の人間を超えた高い存在に、キリストに近い存在に考えていたに違いない。劇の最後に近づくにつれて、このようなイメージで Desdemona を描写しているのが目立つ（勿論それ以前にもある。例えば “the divine Desdemona” 2.1.75)

Emilia. O, the more angel she,  
And you the blacker devil! (5.2.133-)

Emilia. O, she was heavenly true! (5.2.138)

Othello. From the possession of this heavenly sight!  
Blow me about in winds, roast me in sulphur. (5.2.281)

彼女の愛は絶対的、キリスト的愛であり、どんなに冷たくされても、Othello を救おうとする気持があるといえよう。しかし彼女の至高な愛は、その根底に確固たる信念がないままに普通の人間を超えた非常に高さに達していると、いうことに我々は注意する必要がある。というのは、至高な愛というものはキリストの例にまつまでもなく、善悪、美醜などの対立概念を一度は鋭く知覚し、識別しなければならぬが、その後にはじめて、善も悪も、美も醜も（それが具体的に表わすもの

<sup>⑩</sup> Irving Ribner, *Patterns in Shakespearean Tragedy* (London, 1960), p. 112.

も含めて) みなよろしい、愛すべきものだという域に到達する、ものだと思う。彼女の至高な愛は、その根底が曖昧でぐらついているということが出来る。彼女の *Othello* に対する強い愛と、それを救おうとする気持ちにもかかわらず、彼を十分に教化し、救うには、やはり幾分の限界があると思わざるを得ない。

#### 4

次には、Desdemona の愛のこの姿勢と *Othello* の最後の自己認識とはどんな関係にあるかを考えてみよう。というのは、Shakespeare の悲劇においては、hero の自己認識に heroine が大きく関係しているところがある。特に *Othello* ではそうである。ここでは hero と heroine の密接な触れあい、疑い、愛などに視点があてられているのであって、他の劇のように、野望とか、復讐とかいうものを成就する過程にたまたま heroine が介在してくるのではなく、hero の対象が heroine その人に向けられているからである。だから Desdemona の性格や愛し方が直接 *Othello* に伝わり、彼の他人を認識したり、自己認識したりする程度の如何は、Desdemona に特に大きく負っているのである。結婚を契機として、精神においても、肉体においても、また生活において（公私にわたる）Desdemona は *Othello* と一体化しようと努めたことは既に述べたが、Desdemona を愛していた *Othello* も同様に彼女と一体化しようと努めた、あるいは無意識的にそうなったことはいうまでもない。その程度がどれだけ、*Othello* は Desdemona に負っているかを考えてみるのである。

この劇の大団円に近づくにつれて、この両者の関係は明白になるといえよう。*Othello* は Iago の陰謀により、嫉妬に狂い、ついには最愛の Desdemona を殺すことになる。しかし彼女を殺すのはただの殺戮ではなく、彼の誤解の上になり立っているのだが、正義のため、その使者としてである。

It is the cause, it is the cause, my soul.  
Let me not name it to you, chaste stars!  
It is the cause. (5.2.1-)

殺した後、彼の正義の根拠である Desdemona の不貞さが、Emilia の反対にあってぐらつきはじめる。彼は絶対間違いを犯していないことを確信していながらも、万一彼が間違った場合は、墮地獄の罪だととっさに考える。

O, I were damned beneath all depth in hell,  
But that I did proceed upon just grounds  
To this extremity. (5.2.140-)

彼が正直だと思って全然疑わなかった Iago の正体が Emilia の反対によって暴露され、Cassio への嫌疑もとりさられる。彼はついに、Desdemona が貞節であったこと、自分が犯した行為は途方もない間違いであったことを認めざるを得なくなる。すると *Othello* は次のように言う。

O ill-starred wench!  
Pale as thy smock! When we shall meet at compt,  
This look of thine will hurl my soul from heaven,

And fiends will snatch at it. Cold, cold, my girl!  
 Even like thy chastity.  
 O cursed, cursed slave! Whip me, ye devils,  
 From the possession of this heavenly sight!  
 Blow me about in winds! roast me in sulphur!  
 Wash me in steep-down gulfs of liquid fire!  
 O Desdemon! dead Desdemon! dead! O! O! (5.2.275-)

彼にとっては、Desdemona は “heavenly justice” (I. Ribner の言葉) にみえ、それが彼の damnation を要求し、彼自身も地獄の責苦を嘆願しているといえよう。あまりにも強く彼女を愛していたから、しかも彼女の愛の本当の姿がわかったからこそ、Othello は自分の行為に対して、最悪の罰則—墮地獄の責—を求めているのである。そして最後の行 “O Desdemon! dead Desdemon! dead! O! O!” は彼の最愛の者の生命を自ら絶ってしまったという完全な文章とはならない悲しみの絶叫と、その行為に対する自分の罪の深さと、自分は地獄に行ってもよい、Desdemona は自分が以前に思っていた通りの立派な女性であったという歓喜を、表わしているものと思われる。Othello は彼女の価値と自分自身に対する十分な認識があると言えよう。別な言葉で言えば、Desdemona の至高な愛によってこそ、Othello は彼の罪の十分な認識をし、悔い改めたのであるから、彼は救われたといえよう。Desdemona が Othello を救おうとしてその罪を負って死に、復活したキリストのイメージをもっていることと考えあわせてみるならば、また Shakespeare が彼女を慈悲の権化として、注意深く描写していることも考えてみるならば、このことが了解されるであろう。しかし Lodovico, Montano 以下大勢の人を前にしての彼の last words に我々は注意を払う必要がある。

Soft you; a word or two before you go.  
 I have done the state some service, and they know't.  
 No more of that. I pray you, in your letters,  
 When you shall these unlucky deeds relate,  
 Speak of me as I am; nothing extenuate,  
 Nor set down aught in malice. Then must you speak  
 Of one that loved not wisely but too well;  
 Of one not easily jealous but, being wrought,  
 Perplexed in the extreme; of one whose hand,  
 Like the base Indian, threw a pearl away  
 Richer than all his tribe; of one whose subdued eyes,  
 Albeit unused to the melting mood,  
 Drop tears as fast as the Arabian trees  
 Their medicinable gum—Set you down this:  
 And say besides, that in Aleppo once,  
 Where a malignant and a turbaned Turk  
 Beat a Venetian and traduced the state,  
 I took by th' throat the circumcised dog



And smote him—thus.

[he stabs himself

この箇所は異論があるところではあるが、Othello は自己中心に物を考えすぎているといえる。T. S. Eliot が指適しているが、Othello の「自己劇化」(“self-dramatization”)<sup>①</sup>がある。最大の窮地にたつて、大勢の人を前にしては、彼は現実から逃れよう、自分自身を元気づけようと努めている。自分のことは悪く思われぬようにと、考えている。自分の信じやすさのために、Desdemona を殺した彼の罪や、Emilia の死という犠牲をだしたことや、Cassio をまきぞえにしたことや、Cyprus の人心を乱したことに對しては、彼は何も言っていない。Othello のこの態度は、T. S. Eliot の説を引用すれば、「一つの倫理的な態度というより、むしろ美的態度をとり〔中略〕、この態度の根底には、ストア主義があるが、この態度こそはまさしくキリスト教的謙虚さ（ヒュミリティ）とは正反対のものなのだ。」<sup>②</sup>

既にわかるように、この場面での Othello の態度は統一がとれていない。Gratiano 一人だけいる時に言った言葉と、大勢の人を前にして言った彼の last words とは、異なるのである。前者では、彼にはクリスチャンとしての態度、倫理的態度があると言える。後者では Desdemona の特質といえるクリスチャン・ヒュミリティとは正反対のストア的態度がある。Desdemona の愛も、彼が Desdemona を思う気持もあまり含まれていない。彼がみえをきるために、それを無理やりに、背後に押しつけている。Othello は彼女の愛の本当の姿がわかった後では、強く彼女を愛している、むしろ嫉妬する以前よりも、もっと強く彼女を愛していることを我々は知っている。そのためにこそ彼は自殺しなければならなかった。しかし彼の last words では、その気持をゆがゆて人に言い、自分にもそう信じさせようとしている。自害という行為は、過去の行為に對して彼が責任をとったことを意味するが、しかしその姿勢には分裂があるから、Othello が救われたと頭では考えても、やはり彼の魂がさまよっていると感ぜざるを得ない。Brutus<sup>③</sup> や Hamlet の最後の認識の度合よりも、Othello のそれは高いとは言えるが、まだ彼にもこのような分裂があるのである。Othello の最後の姿勢の矛盾は、第一には、当然のことながら、Othello 自身の責任ではあるけれど、特に両者のふれあいは密接な関係をもち、また視点があてられているこの劇の性格からいって、Desdemona のいわゆる“child of nature”の姿勢のまま、愛の高みに達した姿勢のせいも、またそのような彼女の愛が彼を救おうとしたけれども、その愛の性格からいって、彼の心の中に、十分に反映されなかったためでもあると思う。

## 5

最後にこの劇全体をみってみるならば、これは完成に近づいた作品であるといえよう。G. B. Harrison が完成の域に達した Shakespeare 悲劇について使っている“deep tragedy”<sup>④</sup>という言葉

① Cf. T. S. Eliot, “Shakespeare and the Stoicism of Seneca,” *Essays* (Kenkyscha, 1953).

② T. S. Eliot, *op. cit.* pp. 129—30.

③ *Julius Caesar* における自己認識をしていない Brutus の最後に対して、村岡氏は次のように言っている。「日本的な比喻の言い方をすれば、彼の魂は解脱しないで、あの世で迷っているのだ。死ぬまぎわに自分の非を悟り、自分の死を当然と考え、死んでゆく人はその悟りによつて慰められ、死んでゆくための精神的な支えをもっている。そのようにして死んでゆくなら、その人の為にあらかな冥福を祈ることが出来る。しかし迷ったまま死んでゆく人の場合には、我々の気持は安らかではない。」東北大学文学部「特殊講義」(39年度)。

④ Cf. G. B. Harrison, *Shakespeare's Tragedies* (1951).

は、*Othello* に十分あてはまるであろう。*Othello* に使われた劇構成上のテクニックは申し分ない。人間の心理描写もすぐれている。テーマも時間と空間をこえて普遍的である。そして我々は *Othello* の最後に対しては、*pity* も *fear* も十分に感ずる。即ち *Othello* は勇気があり、気高い人格者であるが、それが信じやすさのために、*Iago* の罠にかかって *Desdemona* を殺し、自らも死ななければならぬとき、我々は同情と哀惜の気持を持つし、また彼が少しの欠陥のために死ぬようになったことに激しい恐れを感ずる。*Othello* は不幸に死ぬけれど、この劇を見終って我々は、気のめいるような感じをもたない。苦しみ、悩んだ *Othello* は、拡大して言って人間というものは、決してちっぽけなものではないこと、*Hamlet* の言葉をかりれば、「人間とはなんと素晴らしいものだろうか」(2.2.307) と叫びたくなる。しかし、*Othello* は偉大な人間ではあるけれども、最後に自己認識一神を知ること、神と合一するということに近い意味をもっている一に達した *Lear* 王ほどには、神の域には達しないまでも、人間以上の高い存在にはなりえないのである。その理由は、*Othello* の自己認識の不十分なせいであると思う。*Othello* の最後に対して、彼の魂が成仏していない、さまよっていると我々は感ずる。とにかく我々は彼に対して、なにかやりきれない後味の悪い気持をもち、十分な *catharsis* が働けば感ずるであろうようには、我々の気持が清められたとは決して感じない。結局この理由のために、この劇は成功した作品ではあるけれど、*King Lear* ほどに完成した *Shakespeare* の悲劇とはいえないであろう。そしてこの責任の一つは、*Desdemona* の愛の姿勢に帰せられると思う。「女性的要素は劇〔シェイクスピア悲劇〕の発展に直接大きな影響を与え、それはまれである。」<sup>⑨</sup> という説もあるけれど、この劇を考えれば、既述したように、*Desdemona* とその女性的要素(慈悲心などの)の役割は重大であるし、また *Lear* を悟りに導いた *Cordelia* の例もあわせて考えれば、より一層 *heroine* の役の重大性は明白になるであろう。結局 *Shakespeare* の悲劇においても、*heroine* の重大性に我々はもっと注意を払う必要があるのではないだろうか。

⑨ 本田顕彰、『シェイクスピア悲劇の本質』(紀伊国屋書店、1960年)、cf. pp. 173—4.